

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	SMITHERS, Ryan William
論文題目	Role of Teacher Cognition in ELT: Results from Practitioner Research (英語指導における教師認知の役割—実践者研究成果に基づいて—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、英語教育の実践において、教師という存在に対する教師自身の認知が英語指導を進める上でどのような役割を果たしているのかを明らかにすることである。具体的には、教師が英語やそれらを取り巻く状況についてどのようにして学び、どのように行動しているかを、教師の実践を通して分析し、さらに、彼らの行動にある認知的基盤が何であるかという問題に対して、実践者研究を用いて検証することで答えようとするものである。本論文の意義は、英語教育における実践者研究が、どのように教師の認知を発展させ、実践に関連する知識を深め、教育実践を改善するのかということを追求した点にある。また、これらによって、英語教育学において実践者研究がどのような影響を与えるかについて理論的理解を深めた点も本論文の貢献の一つである。以下、本論文を構成する8章の概要を紹介する。</p> <p>序論である第1章では、本論文の研究背景として、実践者とは何であるか、そして実践者研究が本論文で行う研究をどのように導いていくのかについて述べている。さらに、教師の認知という概念について定義を行っている。最後に、本論文の目的や研究の範囲について概説し、本論文の意義についてまとめている。</p> <p>第2章では、探索的実践の枠組みを用いて、高齢者への英語指導が彼らの生活にどのような肯定的な影響を与えることができるかについて分析した結果を報告している。意味による英語の語順指導法によって、学習者は英語の構造に対する理解を深め、それによって英語学習の動機づけを向上させ、それがさらに英語の理解を深めるという好循環をもたらしていることが明らかになった。また、教師と学習者の振り返りが指導する教師の認知の改善に繋がることを明らかにした。</p> <p>第3章では、英語授業における教師と学習者のやり取りを会話分析の手法を用いて分析し、この手法が教師にとって自らの実践を振り返る際に有効であることを示している。会話分析により授業中のやり取りが可視化され、教師と学習者の社会的関係がどのように構築されていたのかが明らかとなった。教師は学習者に対して授業への積極的な参加を促す一方で、実際には学習者の平等な参加を許していなかったという事実が示された。このことから、会話分析が教師の認識と実践の解離に目を向けるという点で教師認知に有効な手段であることが示された。</p> <p>第4章では、学習者主体の教育に関する教師同士の対話を通じて、教師の相互協力の</p>			

教師認知に対する効果について質的な分析を行っている。学習者へのアンケートと構造化インタビューによるデータを元に、学習者中心の学習が適切かどうかについて、自らの教育法に不満を抱いている英語教師との対話を通じて、教室での実践への理解を深める過程を描いている。これによって、教師同士の対話という教師の相互協力が、教師の実践に対する自覚を深める効果をもたらすことを明らかにしている。

第5章では、組織における問題解決手法であるソフトシステムズ方法論（Soft Systems Methodology: SSM）を用いて、高齢の学習者に対する英語教育のあり方を検討するプロセスと、そのプロセスを通じて得られた知見が述べられている。SSMでは、関係者全員が協力してシステムの改善を目指す行動を取るため、教師にとっても絶えず教育実践を振り返ることができ、教師認知の改善に役立つ面が明らかとなった。

第6章では、高齢者の5年間にわたる英語学習の動機づけを調査し、学習者の動機づけに関する知識が教師の認知を高めるのに有益であることを明らかにしている。教師にとって学習者の動機づけの分析は、学習者のフラストレーションの原因や動機づけの低下の兆候を事前に察知し、将来的に解消することを可能にする点において、教師認知にとって重要な役割を果たすことを示している。

第7章では、現在の英語教育を取り巻く環境を分析し、教師がどのようにビジネス英語教育と向き合うべきかという学際的な検討を通じて、教師の認知がいかなる影響を受けるのかについて分析している。本章の結論として、ビジネス英語教育のような学際的な研究に限らず、教師が新しい領域のことを知れば知るほど、自らの無知について自覚することができ、その自覚によって新たな知識を得ることが更なる実践に繋がることを主張している。

最終章である第8章では、全体の総括を述べている。本章では、第2章から第7章までの個々の教師認知についての分析を踏まえて、教師が自己反省的な探求を通して知識を生み出す力をつける方法が、実践者の教育的葛藤や難問を解決するために必要不可欠なものであることを主張している。最後に、ここまでの実践研究を通して、教師がより幸福で意欲的になることで、学習・教育環境もより幸福で意欲的なものになると結論づけ、本論文を締めくくっている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、実践者研究の枠組みを用いて、これからの英語教師の教育実践において教師認知 (Teacher cognition) という概念がどのような役割を果たすのかについて多面的に検討したものである。教師認知研究の第一人者のSimon Borgは、*Teacher cognition and language education*の中で、教師の信念や知識が教育の改善や衰退などの根底にあることを強調している (Borg, 2006)。このうち、教師が自身の教育をどのように理解しているのかという認識のあり方や教育に関する知識が教師認知と呼ばれるものである。現在は教育の内容や方法が社会の要請によって大きく変化する時代であり、教師自身が教育について深く知ることが強く求められている。したがって、教育における教師の認知とは何かを明らかにし、その形成や変化を観察し、分析する研究は高い重要性を持つ。

本論文では、英語教育における教師認知とその役割を明らかにするために、教師と学習者の記録、教師と学習者の会話、教師同士の対話、教育内容と方針の検討、学習者の動機づけ、教育の外的要因の分析という6つの視点から教師認知の分析を行っている。本論文に見られる独自性として、学校教育での授業を対象とした実践者研究ではなく、高齢者を対象としたいわゆる生涯学習の実践を中心に扱っている点が挙げられる。制度化された学校教育を対象にした実践者研究では、学習者が共通の背景を持ち、指導内容も確立されたものを扱う。しかし、本論文が対象とする事例は、学習者の背景も様々であり、必ずしも決められたカリキュラムが存在するのではないため、教育実践には多くの解決すべき問題を抱えている点に特徴がある。

第2章の実践者研究では、生涯教育という状況を活かして、学びによって学習者自身が成長を実感できる教育方法を導入したことが、その後の学びにどのような変化をもたらしたのかを一人の実践者としての目線から記録、分析を行っている。この章の分析では、学習者の成長を促すことが学習者だけでなく、教育者側にとっても前向きな変化をもたらすことが示されており、教師認知という観点から分析することの有効性を明らかにしている。一方の第3章では、学習者と教師との授業中の会話を分析することで、実際には教師が考えているような授業が実践できていなかったという事実を明らかにしており、そのことを教師自らが自覚することで、内省としてだけでなく、客観的に授業実践を反省し、振り返ることができることを明らかにしている。このように教師認知について詳細に分析することは、教育実践の良い面も悪い面も白日の下にさらすことになるが、その両面に目を向けることこそが教育を発展させる重要な鍵であり、本論文が強く主張するところである。

第4章から第7章での実践者研究は、おもに授業の外側の要因がどのように教師の

認知に影響を与えるかを分析したものである。教師という職業を考えると、当然ながら教師は授業を行う以外の時間の方が長い。教師自らと学習者だけが存在する教室の外には、他の教師や教育に関わる様々な人物、さらには社会環境そのものが存在しており、これらが有形無形の様々な形で教師と教育実践に影響を及ぼしている。本論文では、一実践者の立場から具体的な事例を取り上げて、その過程の中で教師がどのように考え、影響を受けるのかについて観察と分析を行っている。

本論文の分析は、客観的な実験や質問紙調査を実施し、統計的な検定によって一般化が得られたものではない。したがって、本論文は理論の一般化や概念の普遍化という観点からすると不十分な点も多く、これが本論文の限界でもある。しかしながら、この指摘は本論文の価値を貶めるものではない。実際の教育には一人一人異なる教師や学習者が存在し、一度きりの現場にしか見られない実践が現実の教育を形作っている事実がある。そのため、実際の教育実践の中で学習者だけでなく、実践者の一人としての教師が何を行い、何を考えたかを細かく見ていく実践者研究は重要な役割を果たすことになる。本論文は個別の事例を扱った研究であるため、直ちに一般化ができるわけではないが、その一連のプロセスからは教師認知について有益な知見を確認することができるものとなっている。

以上のように本論文では、各章で個別の事例研究を積み重ねながら、全体として教師認知が教育実践において、いかに作用し、いかに重要であるかを明らかにしている。これに加え、本研究の意義は実践者研究という事例の積み重ねと丹念な質的な分析が英語教育の裾野を広げ、発展させることができると示した点にあり、高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年12月11日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降